

館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

10月 1日 今日の通読箇所 ペテロの第一の手紙 1章1～5
「生ける望み」

著者ペテロは、世界に離散し、当時皇帝ネロの迫害のもとで苦難の中にいるクリスチャンたちを励ます為にこの手紙を書きました。ペテロはクリスチャンを、「父なる神の予知されたところによって選ばれ、御霊のきよめにあずかっている人たち」（2節）と記しています。そして、人が新たに生まれさせられるのは、神様の豊かなあわれみによるのであり、その結果、人は生ける望みを持つと言うのです。ペテロ自身、主イエス様が十字架にかかれる時、イエス様を三度も知らないと言う失敗をしてしまいました。その主が復活し、ペテロに新しい力と使命を与えてくださったのです。だから、このイエス・キリストの復活は、ペテロやこの手紙を受け取る大勢のクリスチャンたちに、苦難の中で生きる勇気とキリストの再臨の時にける復活の希望の確信を与えるものなのです。

10月 2日 今日の通読箇所 ペテロの第一の手紙 1章5～12
「救いの恵み」

苦しみの只中にある時、この苦しみはいつまで続くのだろう、しばらくのあいだ、とはとても思えない、という心境です。しかし視点を移して永遠を考えるなら苦しみも「しばらくのあいだ」です。「さまざまな試練」のなかで、祈って助けをいただけることは幸いです。試練によって信仰のテストを受け、金が精錬され純度を上げて価値が増すように、試験済みの信仰は、やがてキリストの、み前に立つとき、賛美と栄光に変えられます。私たちは直接キリストにお会いしたことはありませんが、救われて、主にある喜びを知る者とさせていただきました。この救いについては、預言者たちがたずね求め、御使いたちも見たいと願っていました。私たちは、キリストのゆえにこの尊い救いの恵みに与っているのです。

10月 3日 今日の通読箇所 ペテロの第一の手紙 1章13～21
「神にかかっている信仰と望み」

「キリストの現れるときに与えられる恵み……を待ち望んでいなさい」私たちは今キリストを見てはいないけれど、やがてお会いする時が来ます。その時が、恵みと喜びの時であるために「心の腰に帯を締め、身を慎み」聖なる方にふさわしく待ち望みつつ生活することを教えられます。私たちの信仰と望みは神にかかっているとあります。なぜなら、キリストは預言者や御使いに長い間待た

れて、神様の時が来て、この終りの時に十字架で死んでくださったのです。この救いは「きずも、しみもない小羊のようなキリストの尊い血によった」のですから。神様はキリストを死からよみがえらせてくださいました。一連の救いの御わざは神様によるのです。神様に基づいていますから心強いのです。

10月 4日 今日の通読箇所 ペテロの第一の手紙 1章22～25

「生ける御言」

ここで神の御言は二つの意味に使われています。第一は、「生ける御言」で、人を新たに生まれさせる働きがあるということです。だからクリスチャンとは、朽ちる死んでしまう種から生まれたのではなく、朽ちない種、すなわち、「生ける御言」(23節)によって生まれた者だと言っているのです。第二は、「変わる事のない御言」ということです。著者は、この神の御言の働きについて、イザヤ書40章6～8節を引用し説明しています。即ち、イスラエルの国が捕囚の時、滅亡するような事態であった時にも、神の言である神の約束は変わることなく実現したのです。それに対して人間の栄光は、それが強大なバビロンの権力であっても、草のように枯れ、花のように散っていった、と言うのです。

10月 5日 今日の通読箇所 ペテロの第一の手紙 2章1～10

「生ける石」

ペテロは、4節でキリストを「尊い生ける石である」と書いています。その理由は、第一に主が永遠に生きておられるからです。第二は、キリストが命を与えられるお方だからです。しかも5節では、生ける石キリストを土台とするあなたがたも「生ける石」だと言っています。それは主がペテロを「岩」と呼ばれたことを思い起こしたからでしょう。そして、クリスチャンたちに「霊の家に築き上げられ、……神によるこぼれる霊のいけにえを、ささげなさい」(5節)と勧めたのです。それはペテロが、人の手による神殿ではなく、生ける石、即ち生きたクリスチャンによって構成される霊の家、キリストの教会を建て上げることを目指していたからです。

10月 6日 今日の通読箇所 ペテロの第一の手紙 2章11～17

「おとずれの日」

英国で鋳掛屋をしていたジョン・バンヤンは有名な「天路歷程」を記しました。一人のキリスト者がいろいろな誘惑や困難に会いながらも天の都を目指す旅が記されています。11節は旅人である信仰者への教えです。12節のように、信仰者が異邦人の中に住んでいるのは、当時も現代も変わりません。一般の人々は信仰者の生活を観察しています。主にある魅力的な、りっぱな行いは、人々の

心を耕し感化を与えます。やがておとずれの日に、神様を認め御名を崇めるのです。おとずれの日、すなわち神様が救いのために個人的に関わってくださる時です。このように日々の生活の証しが大きな力なのです。13節には「すべて人の立てた制度に、主のゆえに従いなさい。」とあり、ローマ人への手紙 13章と関連のある教えです。

10月 7日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 2章18～25
「御足の跡」

正しいことをして不当な苦しみを受け、しかもそれを耐え忍ぶなら、神様に受け入れられ喜ばれることだ、とあります。あなたがたは実にそうするようにと召されたのである、とあります。キリストこそ大いなる苦しみを受けられた方です。キリストは何一つ罪を犯したことがなく、その口には何の偽りもありませんでした。このお方が、十字架で死んでくださったのです。キリストはわたしたちの罪を負ってくださったのです。それは私たちが罪を犯して生きることをやめ、義に生きるためです。さ迷っていた羊のような私たちは、羊飼いである神様の愛と保護を受け真の平安を頂いています。救われた者は、主の御足の跡を歩むよう召されているのです。

10月 8日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 3章1～7
「妻と夫への勧め」

この7節の中で、クリスチャンである妻への勧めが六節を要し、夫への勧めは一節だけです。これは妻が信仰をもった場合、特に多くの困難があったことと、当時は婦人の地位が低い時代であったために配慮したのだと思います。妻に対しては、言葉よりも柔和、しとやかさをもって仕えることが勧められています。一番分かりやすい聖書は、文字に書いた聖書ではなく、生活に訳された聖書だと言われたりします。一、二節に「御言に従わない夫であっても、……妻の無言の行いによって、救いに入れられる」とあるのは、この生活訳聖書の効果を述べているように思います。夫に対しては、妻が弱い存在であると認めることと、いのちの恵みを共どもに受け継ぐ者として、尊ぶように勧められています。

10月 9日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 3章8～12
「神様の目と耳」

8節の冒頭「最後に言う」は、2章11節からの要点をまとめたもので、すべてのクリスチャンに対して、5つの徳目「心をひとつにする、同情し合う、兄弟愛をもつ、あわれみ深くある、謙虚である」(8節)を勧めているものです。また9節は、ペテロの第一の手紙2章23節に示された、主イエス様の手本を、

クリスチャンに適用するように勧めたものです。クリスチャンが敵対する者に対して、報復しないで祝福することは神様のご命令です。なぜ、このような態度で生きるべきかを教えたかと言うと、12節にあるように、神の目が、常に導きを示すため、クリスチャンたちの上に注がれているからです。また、神の耳が、導きや助けを求める祈りを聞くためにいつも傾けられているからです。

10月10日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 3章13～21

「善に熱心であれ」

善に熱心であることは、御心に適うことで、神様に喜んでいただけます。また自分の良心に対しても、善を行っているという確信をもつことができます。人に対しても、正しい心でいることができます。神様のみこころを求めて熱心に善を行い一人一人が力を尽くすなら、神様のみわざのために用いて頂くことができるでしょう。14節のように、万一義のために苦しむようなことがあっても、神様の前には幸いなのですから、恐れたり、心を乱したりする必要はない、とあります。私たちがどう生活すればよいのか、聖書によって教えて頂けるのは幸せです。15節のように希望について語れる用意が大切です。19、20節は難しい箇所です。いろいろ解釈があるようですが、はっきりとした解釈ができません。

10月11日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 4章1～11

「近づく終り」

再臨によって生きてキリストにお会いするにしても、死んだのちにお会いするにしても、だれでもどちらかの状態でやがてキリストにお会いすることになります。6節も難しい箇所ですが、ある解釈者は「死人」とはこの手紙が書かれた時代にはすでに亡くなった人のことで、生きていたときには、その人にも福音が伝えられたという意味に解釈しています。すべての人は肉体は死ぬけれど、キリストを信じるならキリストにある命をいただき、霊において永遠の世界で生きると。キリストにお会いする時が来るのだから「神の御旨によって過ぎし」(2節)、身を慎み、励んで祈り、愛を保ち、与えられた賜物をもって神様と隣人に仕えるように勧められています。

10月12日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 4章12～19

「苦難に備えて」

ペテロは再び苦難の意味と、その中におけるクリスチャンの態度について勧めています。その第一は、苦難に伴っている目的を思い出しなさい、ということです。苦難は、私たちをへりくだらせ、目をさまさせ、自らを吟味させるから

です。第二は、苦しみによって与えられる関係を覚えなさい、ということです。これは苦難の救い主と栄光を一つとする経験を得られるからです。第三は、苦難のために倒れてしまわないために、それに勝つ力が与えられることを信じなさい、ということです。14節後半の「……その時には、栄光の霊、神の霊が、あなたがたに宿る」とは、その約束を述べているのです。第四は、神様の御手に自分のたましいを委ねるようにしなさい、ということです。そうすれば苦難の中でも慰めと安らぎを得られるからです。

10月13日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 5章1～5

「長老職の心得」

5章の冒頭でペテロは、「そこで」と言い、今まで語ってきた事柄のまとめとして、この章で幾つかの勧めをしています。1～4節においては、教会で責任を担っている長老たちに勧めています。それは教会を襲おうとしている火のような試練に対応するためには、忠実な牧会者がどうしても必要だからです。長老の仕事とは、「あなたがたにゆだねられている神の群を牧する」(2節)ことです。決して「長老の群れを牧する」ことではありません。ですから、その務めは金銭的利益目当てではなく、心から、しかも熱心に果たすことが求められます。そして人々に対しては、高慢で威圧的な態度に出る罫に陥る危険があるので、謙遜と清い生活をもって、群の模範となることが大事だと言われています。

10月14日 今日に通読箇所 ペテロの第一の手紙 5章6～14

「信仰に立ち」

神様は万物を創造し、私たちを生かし愛しておられます。やがてすべてをお裁きになる方です。私たちは神様のもとにへりくだるべきですが、神様が心配して面倒を見てくださるのですから、思い煩いをゆだねなさいと記されています。悪魔は獲物を求める獅子のように私たちを狙っていますから身を慎み目を覚まし、信仰にかたく立って抵抗するように。ペテロはかつての自分を思い起こしていたかもしれません。苦難によって失望、落胆せず、主を否認することがないようにと。自分ひとりが困難なのでなく、世界の信仰者が主を信じて共に苦闘していることを忘れてはいけないとも教えています。シルワノはこの手紙を口述筆記し、使徒行伝ではシラスと出ています。マルコは福音書を記した人です。

10月15日 今日に通読箇所 雅歌 1章1～17

「ソロモンの雅歌」

雅歌もソロモンの作品だが、この聖書は昔から問題が多く「当時の民謡を集め

たようなもので、そんなに深い意味はない」という意見から「旧約における最高のキリストの愛の啓示だ」という解釈までさまざま。今はソロモンと、その後宮に誘われた少女と、彼女の愛人である羊飼いと物語という解釈で進もうと思う。1章の舞台では、宮廷の女官たちがソロモンに対する憧れを歌っている。そこに現れた少女は、自分の野生と健康のプライドを、また恋人なる牧者の青年を慕う歌を歌う。女官たちはソロモンに代って少女の美をたたえ、その心をソロモンに傾けさせようとする。しかし少女は、青年を誉め、また慕う歌を歌ってやまないのだ。

10月16日 今日に通読箇所 雅歌 2章1～17

「燃える愛」

[1章16-2章1節]は、少女の言葉で、ソロモンの宮殿の華美に比べて、質朴な生活の良さと、その美を誇るようだ。そして、2章全体にわたって、少女は、羊飼いの青年に対する思慕の情を、歌っている。オリゲネスはいう「この書はソロモンにより、戯曲の形式で書かれている」と。また[2章5節]について「神のみ子に寄せる真実の愛に燃える人がいれば、日夜主に憧れ主のこと以外何も語らず、聞かず、また考えない。それゆえ『私は愛のため病みわずらっている』というのだ」と。つまりこの少女の青年に対する愛は、そのままクリスチャンのキリストに対する愛の象徴だ、と解釈するのだ。私も、この解釈に賛成なのです。

10月17日 今日に通読箇所 雅歌 3章1～11

「愛と忠実の見本」

[3章1-5節]は青年を恋慕う少女の歌である。その思いは日夜離れることがない。その青年を捜し求めて、ついに出会えることのできた時の喜びは大きい。一方、宮廷の女性たちはソロモン王の素晴らしさを賛える。[3章6-11節]には、ソロモン王の輝かしい威光が描き出されている。しかしこの少女は、愛する青年の他は何物にも心を動かされない。これはクリスチャンがキリストを愛する見本だ。また、[[3章6、7節]の没薬、乳香はキリストの誕生のことを思わせ、煙の柱は荒野での神の臨在の徴(しるし)を思わせる。そしてソロモン王のまわりにいる忠実な60人の勇士は、キリストに仕える忠実なクリスチャンの見本だ。

10月18日 今日に通読箇所 雅歌 4章1～15

「結実の美」

4章全体はソロモンが少女の美しさを賛え、目、髪など七つの美を挙げています。その美は[2節]で雌羊に、[3節]で果実に喩えられています。健康的な美は実を結

ぶことに直結しています。アウグスチヌスも"クリスチャンの美しさは実を結ぶところにある"と言っています。[4 節]では城の櫓のように毅然とした少女の態度が歌われています。少女は、王宮の女性たちに誘われても、女性たちのようにソロモンに心奪われることがなく、少女の青年に対する愛は揺らぎません。クリスチャンの本当の美しさも、毅然としたキリストに対する愛の姿にあり、それはちょうどオアシスのように、人格の香りを放つ存在です。

10月19日 今日に通読箇所 雅歌 5章2～16

「牧者の訪問」

青年牧者が少女を訪問するのは、キリストが救いと祝福を携えて人の心を訪ね給う象徴である。黙示録に「見よ、わたしは戸の外に立って叩いている」とある通りだ。少女は彼の声聞きながら、何やかやとぐずついでいて、戸を開けるのを渋っている。やがて決心して戸を開いて見るともう青年は立ち去って、その姿は見えない。今度は少女が焦り悲しむ番である。ヘブル書には「今日み声を聞いたなら、心をかたくなにしていけない」とある。どうかいつも主の声に従い、決してキリストを悲しませることがないように、また自分もこうした嘆きや悲しみを経験することのないように、信仰の従順を心がけたい。

10月20日 今日に通読箇所 雅歌 6章1～13

「教会の魅力」

[4 節、10 節]の形容は、少女の美を称えたものだがこれはクリスチャンの、また教会の美の形容でもある。砂漠の夜の月は、特別に神秘的な魅力を持っている。夜が明けようとするときの東の空、つまり東雲（しののめ）も、独特の砂漠の美だ。また砂漠を焼き尽くすような真昼の太陽も、輝く一つの美だ。旗を立てて砂漠を進軍する軍隊、その威力も美しい。世の中が砂漠のように、荒涼としていればそれだけ、また夜が暗ければそれだけ、敵の恐怖が激しければそれだけ、いよいよ対照的にこれらのものの美は映えるのだ。教会もそのように、この世にあって美しく力強く、魅力的であるように、そのことを望んで祈ろう。

10月21日 今日に通読箇所 雅歌 7章1～13

「なつめやし」

ソロモン王はしきりにシュラムの少女の美を称え、決定的な求愛の言葉をはなつ。しかしあの青年に堅く結びついた少女の心は、動かすべくもなかった。ここに少女の美の形容に「なつめやし」が出てくるが、砂漠のオアシスに群がってそそり立つなつめやしの木は本当に立派だ。しかも葉の間にびっしりと成る実は甘くおいしく、ほとんど遊牧民の主食、命の綱だ。我々も先日のイスラエ

ル旅行で買い求めたので皆さんも試食した。同じようにクリスチャンも立派で、その実も甘美だといいいのだが。

10月22日 今日の通読箇所 雅歌 8章1～14

「愛の勝利」

昔の相愛の男女は、腕にお互いの愛の契約の入れ墨などをしたものだが、それでもいわゆる心変わりには避けられなかった。[6節]にある「心に置く印」こそ、確かな愛だと言える。本当の愛は強い。洪水のように反対、迫害、困難が押し寄せても、最後には愛が勝利する。我々はここに、キリストの愛を置いて見ることもできる。「神が味方なら誰も我々に敵し得ない」のだ。キリストに対する我々の愛を置いて見るのもいい。あるいは人間関係の幸福の秘訣である相互の愛を考えるのもいい。とにかく聖霊による愛が注がれることを祈ろう。

10月23日 今日の通読箇所 イザヤ書 27章1～12

「滅亡と回復」

イザヤが現に奉仕していた時代は、罪のためにイスラエルは滅亡し、ユダもやがて同じ運命をたどろうとする、言わば末期の状態だった。イザヤは警告を語りつつも、彼らの最後については絶望的な気持ちにならざるを得なかった。しかしその一方、神の約束はすたらず、アブラハムの子孫が永久に見捨てられることはないという、信仰が、彼の中にむらむらとこみあげてくるのを禁じえない。預言という言葉がそもそもこの「こみあげる」という意味から出ているのだ。それゆえイザヤの預言は、ユダの滅亡と、終末のその回復とを、不思議に交錯させつつ、語られてゆくのだ。

10月24日 今日の通読箇所 イザヤ書 28章1～13

「教育の天才」

休暇旅行で萩に行き、吉田松陰の「松下邨塾」を見てきた。彼はこの物置を改造した粗末な学塾に身分の低い青年を集め、2年間彼等を教育した。その子弟たちはすなわち明治維新の原動力となったのだ。松陰が教育の天才といわれるゆえんだ。イザヤ書のこの章の[7～13節]に、当時のユダの祭司、預言者など、いわゆる教育担当者の実情が書いてある。彼等は大体において酒が好きだ。生徒の尊敬も信頼も失いながら、ただ知識と教訓と規則を羅列してそれが教育だと思っている。「ここにも少し、そこにも少し」中途半端、形式的に教えて、徹底、周到の工夫はない。困った話だ。

10月25日 今日の通読箇所 イザヤ書 28章14～29

「隅の石」

「見よ、わたしはシオンに一つの石を据えて基とした。これは尊い隅の石であ

る」[16 節]キリストは「この『隅の石』とは自分のことだ」といわれた。ソロモンが神殿を建てた時に、運ばれてきた多くの土台石の中に、大きすぎて始末の悪いのがあった。それを跳ね出して、揃った石だけで土台を据えてみたが、うまくゆかない。今度はあの大石をまず先に据えて、他の石をそれに合わせて並べるとうまくいった。これが諺になった。我々も生活の設計に当って、キリストを跳ね出した方が良さそうに見えることがある。しかしそうでなく、万事をまずキリストに合わせる事だ。

10月26日 今日に通読箇所 イザヤ書 29章1～12

「飢えと渇き」

飢えた者が食べることを夢見ても、覚めるとその飢えが癒えないように、渇いた者が飲むことを夢見ても、疲れてその渇きが止まらないよいうに・・・」[8 節]なんと淋しい姿だろう。何か欲しいものがあると、それさえ手に入ればどんなに満足だろうと夢をえがいて、必死に追求し努力する。しかしそれを手にすると、しばらくは満足して喜ぶが、間もなく飽きてくるか、またはその満足に慣れて感激がなくなる。そしてまたなにかにあこがれる。永遠の飢え、永遠の渇き、これが人生だ。真の神のもとに来て、そこに真の満足を見出すまでは。

10月27日 今日に通読箇所 イザヤ書 29章13～24

「説教と居眠り」

牧師の説教が長すぎたので、最前列の人まで居眠りを始めた。講壇の後ろに並んでいた役員の一人在、あまり長い説教に腹を立てて、後ろから牧師に聖書を投げつけた。これが外れて眠っている最前列の人に当たった。すると彼は言った。「もう一つ聖書を投げろ。まだ牧師の声がきこえるぞ」これはビリー・グラハム先生から聞いた話だ。確かに居眠りの時には「心は遠く離れる」だろう。でもこの章の[13 節]は、居眠りのことではあるまい。キリストの言われた「『主よ、主よ』という者がみな天国に入るのではなく、父のみ旨を行う者だけが天国に入るのである」という言葉と、同じ意味を教えているのだと思う。

10月28日 今日に通読箇所 イザヤ書 30章1～7

「エジプト同盟」

むかしのイスラエルは、北にアッシリア、バビロン、南にエジプトなど、南北の超大国に挟まれた小国で、外交の舵取りが難しい環境だった。イザヤの頃、親エジプト派が活躍していたが、エジプト派にせよ、アッシリア派にせよ、神に頼るよりも強大国を当てにして、政治的戦略に右往左往するありさまだった。ここにイザヤはエジプトに頼っても、彼等はイスラエルを救うことができないことを警告し強調する。真に頼むべきは神なのだが、彼等はそれを忘れ、外国との同盟のために、神のみ心にかなわない様々な要素を国内に導入する。結局

これは、神とイスラエルに恥辱を来すだけの結果に終わるだろう、と。

10月29日 今日に通読箇所 イザヤ書 30章8～17
「メッセージ」

わたしは「説教に注文、リクエストがあったら言ってください」などと広告する。しかしイザヤ時代の預言者は「正しいことをわれわれに預言するな。耳に聞きよいことを語れ」[10節]などと注文をつけられたらしい。預言者のメッセージが彼等の耳に痛いからだ。しかし、預言者がサービスマンになって会衆に快いことばかり語れば主の奉仕者としては自殺と同じだ。では説教者は自由勝手に話せばよいのか。それもいけない。神と会衆両者のためのメッセージが大切だ。真に微妙なことではある。

10月30日 今日に通読箇所 イザヤ書 30章18～33
「神様のみ声」

ここに再びイスラエルの回復と祝福の預言がくりかえされる。我々も同じく罪を犯し呪われた者だが、キリストの救いによって回復祝福を与えられたのだ。そのクリスチャン生涯について、[21節]に「あなたが右に行き左に行くとき、そのうしろで『これは道だこれに歩め』という言葉を書く」とある。そのように神は一步一步の導きによって、あやまちや危険な道から我々を守られる。しかし神の声が「うしろから聞こえる」というのは暗示的だ。その声を聞くには立ち止まらなければならず、耳を傾けなければならない。勢いづいてどんどん歩いていけば、声は聞こえないのだ。

10月31日 今日に通読箇所 イザヤ書 31章1～9
「母鳥と雛鳥」

イスラエルはその罪の裁きの日の間、ずいぶん諸外国とその軍隊にいじめられた。その時の軍隊は、神の裁きの鞭だったのだ。しかし今イスラエルの許しと回復の日がきた。主が天から下ってきて、エルサレムをお守りになる時、いまは押し寄せる外国の軍隊も、まるでライオンを囲む羊飼いのように、恐れて手も足も出ないのだ。そのときイスラエルは、強くて優しい親鳥がその雛を守るような、主の力と愛の保護を感じるのだ。救われて罪を許された我々も同じように毎日、神の愛と保護の中に守られて生活している。これは何という、すばらしい神の恵みだろう。